出来事ファイル（№23－6）

■5月5日　元町商店街もこどもの日

長い歴史をもつ「元町シスターズ」。元町商店街の玄関口で来街者のお迎えです。

これから「もとづきんちゃん」に会うからね・・・。大人も子供も一生懸命デス！

記念写真は、やっぱり、もとずきんちゃん！元町での集客力ナンバーワン！

元町商店街散策のみなさん、元町がはじめての方も、みんなみんな私の友達です！

■もとまちハーバークリーン作戦

もとまちハーバー懇談会では5月10日（水）正午12時から、神戸駅東地域一帯のクリーン作戦を実施した。エスタシオン・デ・神戸から11名の方々の参加がありました。

毎月、第1水曜日12時より、地域の企業様有志で実施しております。多くの方々のご参加をお待ちしております。

エスタシオン・デ・神戸のみなさん

□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名と住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で２名の方にペア招待券をお送りします。

◎「大名茶人 織田有楽斎」

織田信長の弟で、茶人として名高い織田有楽斎（1547～1622）ゆかりの京都・建仁寺の塔頭「正伝永源院」の寺宝などを紹介する四百年遠忌記念特別展『大名茶人 織田有楽斎』

会場：京都文化博物館
☎075－222－0888
会期：4月22日（土）～6月25日（日）

◎「ルーヴル美術館展 愛を描く」

西洋社会では、愛の概念が絵画芸術にどのように描出されてきたのか、ルーヴル美術館の膨大なコレクションから精選された73点の絵画を通して浮き彫りにします。

会場：京都市京セラ美術館
・展覧会お問合せ
☎075－771－4334
・チケットお問合せ
キョードーインフォメーション
☎0570－200－888
会期：6月27日（火）～9月24日（日）

サッソフェラート
本名 ジョヴァンニ・バッティスタ・サルヴィ《 眠る幼子イエス 》
1640-1685 年頃パリ、ルーヴル美術館蔵
Photo／© RMN-Grand Palais(musée du Louvre) Stéphane Maréchalle
distributed by AMF-DNPartcom

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、5月12日（金）10時から110時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(株)ＫＫテクノ）中村圭遥、（神戸市都市局景観政策課）小林凛・西尾俊広、（こうべまちづくり会館）木原正剛、（佐野運輸）入山隆憲・北島幸宏、（神明倉庫㈱）藤尾憲弘・十時実希、（トマト銀行）岡村恭輔、（兵庫県信用組合）井上博仁・石田典彦・宮崎克毅、（新光明飾㈱）藤田直之・西村友博・大森貴美子、（佐田野不動産㈱）佐田野宏之以上、16名のみなさんでした。毎月第２金曜日午前10時、栄町通６丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

神戸元町商店街 楽市楽座情報 6月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー（無料）TEL361－4523

6月 8日（木）～6月13日（火）第25回ひまわりグループ展
6月15日（木）～6月20日（火）第11回橋水会水彩風景画展
6月22日（木）～6月27日（火）第21回風の会水彩画展
6月29日（木）～7月 4日（火）神戸の鳥瞰図展・青山大介作品展

◇元町映画館（有料）TEL366－2636

5月27日（土）～6月 2日（金）『ケアを紡いで』・『百年の夢』・『カラヴァッジオ』
『アメリカから来た少女』・『ナナメのろうか』
6月 3日（土）～6月 9日（金）『屋根の上のバイオリン弾き物語』
『サポート・ザ・ガールズ』・『道草』
6月 3日（土）～6月16日（金）『ジョージア、白い橋のカフェで逢いましょう』
6月10日（土）～6月16日（金）『アートなんかいらない!』・『東京組曲2020』
6月17日（土）～6月23日（金）
『こわれること いきること』・『ブーチンより愛を込めて』
『凪の憂鬱／コーンフレーク』（日替わり上映）
6月17日（土）～6月30日（金）『私、オルガ・ヘプナロヴァー』
6月24日（土）～6月30日（金）『銀幕の詩』
6月24日（土）～7月 7日（金）『アシスタント』
【予定は変更になる場合がございます。】

みなと元町 TOWN NEWS タウンニュース

発　行：みなと元町タウン協議会　住　所：〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内　発行人：奈良山喬一　編集人：岩田照彦　電話・FAX：078－391－0831

元町商店街誕生から150年を目前に、私たちは何を為すべきか

合資会社ゼンクリエイト　根津　昌彦

本紙面でも何度も取り上げてきたJR神戸駅・ハーバーロード周辺のまちづくり構想ですが、6月2日に4年ぶりにリアル開催されるタウン協総会にて承認いただき、同構想に基づいていよいよ西元町・JR神戸駅前界隈が動き出していきます。

直近の動きとしては、今年4月にJR神戸駅前広場（北側）のデザインヴィジュアル（図1）が公開された他、元町通6丁目の旧ホテルシェレナ跡地の最後の敷地で建設される和田興産の19階建て高層マンションの外観パースも4月の地元向けの建築概要説明会にて明らかにされました（図2）。

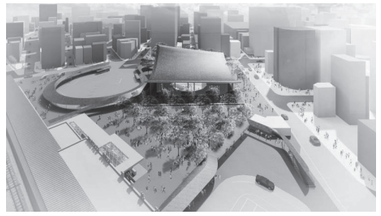

図1．JR神戸駅前広場北側鳥瞰パース

同マンションは元町商店街の西の入口に位置することから、商店街を挟んで向かい側の築55年を超える連棟建区分所有ビルとの一体開発の可能性について、昨年連棟建区分所有者と和田興産との間で対話を行ってきました。その際に商店街の道路空間の上部空間を利用して建物を建設できれば、さながらフランスの凱旋門のようなシンボル建築になり、その建築によって商店街への誘客も図れるのではないかといった議論にも及んでいました。残念ながら、和田興産側が希望する開発スケジュールの関係から、一体開発という夢の構想はついえたものの、対話を通じて得たキーワードである「凱旋門」からヒントを得て、フランスの大規模な都市再開発地区ラ・デファンスにあるシンボル「新・凱旋門（ル・グラン・ダルシュ）」のデザイン（写真1）を取り入れたスタイリッシュかつモダンな外観の建築物が、3年半後に完成する予定です。

図2．元町商店街西側入口に建設される高層マンション完成予想図

このほかにも、今回まちづくり構想を取りまとめたエリア内では、JR神戸線高架下の再整備が徐々に姿を現してきたほか、旧居酒屋源べい跡地においても、神戸高速鉄道が再開発計画を検討されています。JR神戸駅から元町商店街に至るメインの歩行者動線上で、D51広場とも至近距離にあることから、角地に「まちかど広場」を整備して市民の憩いの場と賑わいづくりに寄与したいといった考えが提示され、地域としてはぜひともその方向での開発を進めていただきたいと、まちづくり構想の中でも位置づけをしています。

写真1．ラ・デファンスのシンボル新凱旋門

変わりゆく元町商店街西側のエリアでは、今年度さらに今後のまちの変化をまずは地域の方々に知ってもらおうと、同まちづくり構想実現に向かうステップとして、7月の元町夜市を皮切りに年内にいくつかの魅力スポットでのイベントを仕掛けていこうと、ハーバーロード・ワーキングにて企画を進めています。現在旧シェレナホテルの解体工事が完了し、期間限定できらら広場よりその姿を望むことができるようになった登録有形文化財である松尾ビル（写真2）にも注目が集まってきたり、某テレビ番組での取材によってますます認知度が高まってきたD51広場など、磨けば光る魅力ある資源が溢れています。こうした街の魅力ある資源を再発見する機会や、賑わいのあふれ出しによって「歩いて楽しい」を体感できるイベントなどを、今秋にちりばめていけたらと願っています。

写真2．向かいのビルから松尾ビルを望む

一方、タウン協エリアの東側に目を向けると、鯉川筋の歩道拡幅工事や中央幹線沿いへの大型観光バス停車スペースの整備から1年経って、整備前よりも良くなったといえる部分はもちろんあるものの、新たな課題とも向き合ってきた1年、これからどうしていくべきかを考えなければならない事柄が見えてきた1年でもあったように思います。

車線数を減少させて広げた鯉川筋の歩道は計画時点に設定した効果や目論見が期待通りの成果を上げているか、また、大型観光バスの無秩序な停車によって交通渋滞を起こしていた問題を解消すべく新たに大型観光バス停車スペースを設置したが、元町商店街をぶらぶら歩きする観光客までも減らしてしまってはいないかなど、毎月の定例会での議論が尽きません。さらには、公の情報発信という大義の元に公道上に設置されたデジタルサイネージ広告機器のランニングコストを民間広告料収入で賄おうとする社会実験など、長年のまちづくりで取り組んできたことと逆行するようなことが起こってしまっている現実もあり、いろんな面で元町エリアのまちづくりは転換期を迎えていると言えます。

来年、元町商店街は誕生から150年を迎えることになります。エリアの西側だけではなく東側にも築50年前後を経過した建物更新が難しいとされる区分所有の商業ビルがまちの要となる場所にいくつもあることなどを含め、エリア全体としての将来ビジョンをしっかりと語り合い、目指すべき姿を共有していく丁寧な取り組みが、今もっとも必要なことではないかと考えています。

海という名の本屋が消えた（115）

平野義昌

西村旅館（7）

前号に続いて「金曜」内容を紹介。第八号1949（昭和24）年9月5日発行に、落合重信「僧似雲と兵庫の歌人たち」。延享2～4（1745～47）年徳川吉宗の時代、須磨源光寺（現在現光寺）に庵を結んだ僧。同寺は「源氏物語　須磨の巻」の舞台。

第九号同年10月31日発行。第七号貫一「八雲手簡入手」に感銘して2篇寄稿あり。

小川篁風（医学博士）「八雲先生の片影」。1894（明治27）年熊本第五高等学校入学。

〈……毎日寄宿舎から夕方納涼の散策に出ると、学校前の教師館の前に、浴衣がけで、珍らしくも、モノクル眼鏡の短躯の外人が、逍遥せられるのをよく見かけた。それが小泉八雲先生であった。〉

1914（大正3）年小川ドイツ留学。師事したエデンス博士は八雲作品を愛読、親日家。留学終了記念に博士から八雲『日本』（ドイツ語訳）を贈られた。

木村毅「ヘルン断片」。「ラフカディオ・ハーン」の発音にこだわる。八雲自身が「ヘルン」と発音したし、文献にもある、と。木村は早稲田大学英文科3年時に徴兵。2年後復学すると同級に「ヘルン」子息一雄がいた。顔を知る程度。級友の話では、一雄は試験日を忘れ、弁当を持って出かけ落第した。また「ヘルン」が上田敏（1874～1916年）の卒業論文を「稀にみる英文ライタア」と評価し、厳しく批評したことを紹介。美文を書きすぎる、自分で考えたことを、もっと単純な、しかし自分のものである文章で書け、と戒めた。同年9月10日の「金曜会」第100回記念祝賀会報告掲載。会員約80名が集まる。同人代表挨拶、記念講演、貫一の回顧談など。余興に竹中郁が手品、桂米團治（4代目）落語他、会員が義太夫、謡曲、長唄を披露した。

第十号「特輯號　兒童詩集」同年11月30日発行。貫一は竹中監修の児童詩誌「きりん」の活動を「意義のある、喜ばしい次第」と認め、特集号出版。大阪市の小学1年生・山口雅代（補註1）の12篇。彼女は脳性マヒで自筆できない。口に出すことばを母親が代筆する。加筆・削除なし。竹中も指導をしない。

「母さんの　め」。

〈ほんまのときは／くろくて／ひかって／大きいめ／うそのときは／きいろ　ちゃいろ　あづきいろ／などが／まじつた　へんないろ／それでわたしは／じつとみるの〉

貫一の娘・春子幼少時、10年居候中の画家・半月庵（補註2）が彼女の絵の才能を認めた。彼の提案を受け、貫一は良い画材道具を与え、自由にのびのび描かせた（当時の絵掲載）。ところが、学校で教師の批評・指導を受けると「いぢましい絵」になったという経験がある。竹中の方針に共感する。

第十一号同年12月30日発行（奥付第十号と誤記）。浦本政三郎「日本民謡碑の誕生」、牧村史陽「食い倒れ大阪名物」など。

第十二号（奥付日付昭和24年12月30日）。海運業・三上雅清が1913（大正2）年の孫文（1866～1925年、号・逸仙、中山）亡命秘話「孫逸仙の神戸亡命」を寄稿。孫文はたびたび神戸に来た。1924（大正13）年11月28日兵庫県立神戸高等女学校での講演「大亜細亜問題」がよく知られる。三上が明かすのは父・豊夷（とよつね）が関わった「もっとも劇的な神戸潜入と脱出の模様」。1911（明治44）年孫文は辛亥革命に成功し、翌年南京で中華民国樹立。13年来日の目的は日本政府と鉄道借款交渉、それに支援者への挨拶。英雄として各地で大歓迎された。帰国すると清朝軍閥・袁世凱に追われ、国外脱出。日本政府は、日中関係安定、孫文は反政府人物、という立場。孫文入国を禁じた。豊夷は「孫文を日本が保護して彼の理想どおりの国家を作らしむることが日華両国の幸福、両国提携実現の第一歩」と考える。孫文から「伊予丸にて行く、たのむ、なかやま」の電報が届く。松方幸次郎（川崎造船所社長）と服部一三兵庫県知事も動く。和田岬沖で豊夷部下が孫文一行3名を伊予丸から小舟に移し、川崎造船所岸壁で松方が出迎え、豊夷が諏訪山の隠れ家に匿った。警察、新聞記者の目をかいくぐり、豊夷が連絡役になり、近くの料亭で同志・支援者らと策を練った。服部知事は外務省からの問い合わせに「行方不明、捜索中」と返事し、孫文に警護をつけた。豊夷は神戸から横浜に移すため、大阪商船の協力者に頼る。エリモ丸が垂水沖で停船し、孫文を乗せた。航海中の船を停船させることは重大事。協力者は孫文のため「職を賭して一肌ぬいだのである」。従来の説と若干異なる。補註3

第二巻第一号＝通巻第十三号1950（昭和25）年2月13日（奥付十二号と誤記）。表紙の絵は町田曲江（信州在住の日本画家、第15号まで）。会員が世界各国の正月風景寄稿。

通巻第十四号（奥付2月13日発行、第十二号と誤記）。貫一「ビリヨン神父訪問記」。扉に神父肖像写真。1928（昭和3）年奈良の神父を訪問。春子が在学する聖心女学院校長の紹介だった。本稿第100回のキリスト教と学校の章で登場した「アマトス・ヴィリオン」のこと（今回貫一に従い「ビリヨン」と表記）。ビリオン神父（1843～1932年）はフランス人。1868（明治元）年長崎に来航。まだ禁教の時代、隠れキリシタンたちが流刑され、神父も教会に監禁された。禁が解かれ、71（明治4）年神戸着任。大飢饉で捨て子が増え、教会で面倒を見るも限界あり、横浜の教会に引き取ってもらう。77（明治10）年フランスから修道女4人が神戸に派遣され、孤児救済事業開始。その後神父は京都や山口に転任し、布教の傍らフランス語塾、仏教研究、キリシタン史研究。津和野に殉教者の墓を建立し、山口ではフランシスコ・ザビエル居住跡を発見して記念碑建設。1925（大正14）年奈良着任。

貫一はキリシタン関係古書を持参。神父も愛書家。互いの稀覯書を見せ合い、古書談義。

〈西村さん私も古いの本あるよ。待って待って。私も古いの本大変好き。〉

貫一は神父からザビエル記念碑絵葉書（署名入り）を贈られた。

〈ビリヨン様の書斎の向うに土蔵があります。覗いて見ますと唯書物が、ビール箱を積み上げた本箱に一杯。この土蔵以外に小さな室が二つほどありますが、全部書物と雑誌。神父のベッドは書斎の南東の隅に一寸平らな所があります。（後略）〉

1932（昭和7）年4月神父昇天、90歳。来日以来故国に帰らなかった。

通巻第十五号同年4月7日。増田「尾崎紅葉の晩年」、池長「現代式文化交流」他。

通巻十六号同年5月27日発行。表紙の絵は川崎杜芳（芳熊）「長江を呑む怪魚」（18号19号も）。町田梓楼（信濃毎日新聞社長）「文章の苦心」他。

通巻第十七号同年6月30日、「特輯號　吉田文五郎」（「吉」は「土＋口」）。文楽人形遣い「吉田文五郎芸談」（金曜会での講演速記録）他。表紙「娘人形」など写真5葉、紙質も通常と違い、定価80円。好評につき増刷。

通巻第十八号同年7月30日発行。森於菟「脈鈴――露伴と鷗外餘録」他。「脈鈴」とは釣竿の先に取り付ける鈴。日露戦争の頃、釣り好きの露伴は鷗外に詩を贈った。

〈脈すずはいまだ鳴らずて／気はしづむ川の水底／大利根の深き夜を釣る／釣糸の長き思いや〉

於菟は露伴が「ひとり黙然と釣糸を垂れる姿」を想像。「孤独の中にも澄みに澄むおのれの心境」を詩に託す。露伴は「鈴からかすかな脈動が掌に伝わるのを感じたであろう」。

通巻十九号同年8月25日。扉に池長所有の南蛮画。川嶋「楠公墓の発掘」。焼失した湊川神社復活と墓の埋蔵物調査・研究を唱える。川崎「松方幸次郎氏の思ひ出」。同年6月死去した松方の人柄と才幹を偲ぶ。

〈会社に於ては精励無比、部下に対しては寸毫も仮借するところのない社長であったが、一面、人に接しては奇智諧謔止るところを知らず、誠に衆に親しまれる小父さんでもあった。〉

通巻第二十号同年9月30日。「特輯号　上井正三詩集」。伊賀上野の農民詩人、竹中の推薦。表紙絵も竹中（第23号まで確認）。

通巻第二十一号同年10月30日（奥付二十号と誤記）。川崎他会員寄稿。後記に、紙数増量「大奮発」、月極購読申し込み増、とある。

通巻第二十二号同年11月30日発行（奥付二十号と誤記）。小畔四郎（こあぜ）「南方熊楠先生の採集」。熊楠標本採集諸国遍歴のエピソード。小畔は陸軍退役後海運会社勤務、在野の民俗学者・熊楠に師事。1929（昭和4）年田辺湾での昭和天皇進講のお膳立てをした。

長田富作編『註解南方録』（金曜会茶道研究会、へちま文庫、限定300部）について、非売品ながら希望者に500円で頒布、と告知あり。また「金曜」創刊号完売し、千円でも譲渡希望ある由。

通巻第二十三号12月8日発行。川嶋「地名往来」他。残念ながら第二十四号から三十四号は中央図書館欠本。

写真「金曜」表紙。13号、16号、17号、20号

補註1　山口は健在。2022年『こころがゆれた日』（編集工房ノア）出版。

補註2　「半月庵」不明。貫一は才能ある人を援助。「金曜」寄稿者の東都平凡司（三田平凡寺、趣味蒐集家）は家相研究者として信頼され「戦争中相当長く」滞在。山口昌男『内田魯庵山脈（下）』（岩波現代文庫、2010年。貫一家族について誤りあり）。

補註3　船は「信濃丸」。8月9日松方と三上が小舟に同乗し、造船所に上陸、諏訪山常磐花壇の山荘に匿う。服部知事は牧野伸顕外相に、孫文無事上陸、渡米を説得中、と極秘報告。8月16日神戸港から「襟裳丸」で横浜へ。（神戸新聞社編『火輪の海　下巻』（神戸新聞総合出版センター、1990年）

引用文は適宜新字・新かなに直した。

みなとMOTOMACHIケンチクさんぽ vol.23

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会　地域まちづくり委員会

神戸の地図のイメージ

いつもはためになるコラムが多いと思うのですが、今回は少し肩の力を抜いて書かせていただきます。職業柄、土地や建物を扱うために地図を見ることが多いです。施主さんから敷地の情報をいただき、地図から法規制や周辺状況をある程度把握してから現地に確認に行くというのが一般的な流れなのですが、現在ではスマホやカーナビに任せてしまい、現地調査でも事前に地図を見て経路を想定して行くということがなくなり、それどころかストリートビューという便利な機能によって実際に現地に行かなくても周辺環境が大まかにわかってしまうようになりました。それでも設計をするにあたって、法規制を守るために、周辺環境や日当たりなどの考慮するときにはじっくり地図を読み込む必要があるので、普段から人よりは方位や地形などを気にしながら生きているつもりです。

そこで突然ですが、みなさんがイメージする神戸の街ってどんな地図になっていますか？私は東灘区に住んでいるのでちょっと偏っているかもしれませんが、北に六甲山、南に大阪湾と人工島、東西に幹線道路と鉄道が走り、東西によこたわる六甲山を超える道路や鉄道が北側の街とをつなぐため南北に走っているといった感じです。みなさんも坂道を下っていったらそっちが南というように北側が山で南側が海という絶対的な感覚があるのではないでしょうか。

でも鉄道や車で東西に移動する時に元町あたりで市街地が狭くなって、キュッとまとめられてまたそこを超えると広がってくるといった感覚はありませんか。（図１）

国道が合流したり、ＪＲと阪急がいつの間にか並走していたり、神戸高速鉄道の駅で阪神電車と阪急電車がホームで向かい合って停まっていることがあったりと。

そこで、地図をちゃんと見てみると実は図２のように南北の軸に対して街区が南西に少し傾いていて、元町あたりで大きく湾曲して弓なりになってまた海に沿って東西の規則的な格子の街が東西に続くといったようになっています。そして、さきほどの感覚的なイメージがあった六甲山が元町あたりで南に張り出してきて山と海がとても近くなっているのもわかります。きれいに東西に広がっているというよりは少し傾いて東北東から西南西の方向につながっていて、明石海峡大橋のある舞子あたりまで続いています。　実は街区が南西に傾いていて、元町あたりで大きく湾曲していることと、山と海の距離が近いことが、元町周辺が海運業で栄えて、みなと元町という言葉が使われるようになった所以となっているんです。

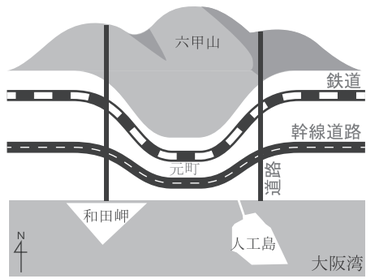

図１　わたしの神戸の地図イメージ

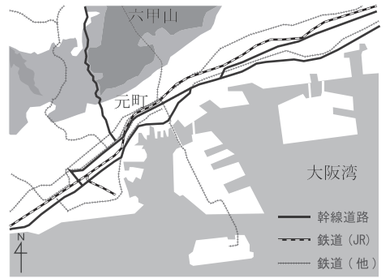

図２　実際の神戸の概略地図

みなと元町のはじまり

平清盛が整備したという『大輪田の泊』のことは皆さんご存知かと思います。場所は現在の和田岬のあたりですが、なぜここに清盛以前の先人が港を設けたかという理由ですよね。まずは、冬になると西高東低の冬型の気圧配置による西からの強い季節風が吹き、明石海峡のあたりでは特に船の運行に大きな影響を与えます。現在でも明石海峡大橋が強風で通行止めになることがあるくらいなので、海上も強風が吹くことは想像できると思います。しかし、ちょうど和田岬あたりは弓なりになってほぼ東向きに海に面しているのでこの季節風の影響をうけにくいようになっています。正確なことはわからないのですが、このあたりは平清盛によって埋め立てられたらしく、より南に陸を張り出して、海での西風の影響を受けにくくしたのではないかと想像されます。（図３）

そして、山と海との距離が近いということは図４のようになだらかな平地から続く海に比べて陸に近い距離で海底が深くなっているので大きな船も停泊させることができる深い港にすることができます。現代の造船や土木の技術レベルであれば大きな問題ではないかもしれないですが、平安時代の頃と考えると条件の良いところに港を設置することが必須となるはずなので、地理的にはこのあたりが最適だったのでしょう。そしてこの条件を活かして港が発展し、鎌倉時代以降は兵庫津として日宋貿易や日明貿易の拠点として使われ、幕末には日米修好通商条約によって開港場の一つとされ、外国人居留地が設けられ、今の旧居留地や北野町の異人館といったみなとまち神戸らしい街並みがつくられる礎となりました。一応、諸説ありますので、その中の一つの説として受け取ってください。

最後に余談になってしまいますが、神戸の街には図5に示すような東側の3階部分より上のあたりが斜めになっている建物が実はけっこうあります。これは神戸では街区が南北軸から少し南西に傾いているせいで法的に生まれる形状で建築家泣かせの部分でもあるのですが、こうなる条件がなければ今の神戸がなかったと思うと少しありがたみすら感じてしまうわけで。

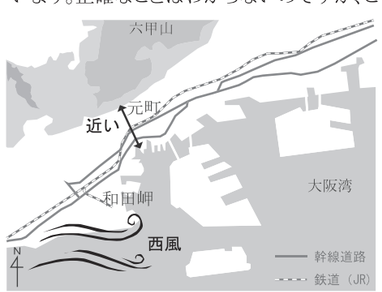

図３　和田岬の地理的条件

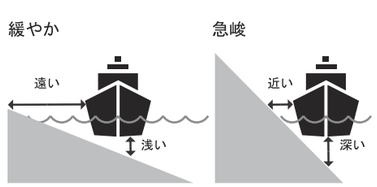

図４　船と海の関係

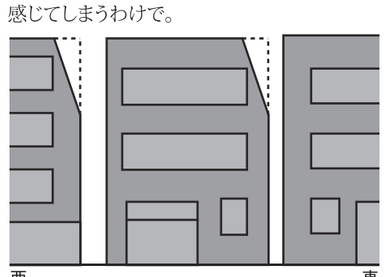

図５　神戸の建物の特徴

山﨑 康弘（やまさき やすひろ）
㈲シンプレックス一級建築士事務所
神戸・芦屋・西宮を中心に建築設計をしています。